
A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

紫猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

【Nコード】

N4834Z

【作者名】

紫猫

【あらすじ】

幼いころから、祖父と二人きりで、古い灯台に暮らすジェシカ。彼女には秘密の友達がいた。謎めいたアランは、いつもジェシカに優しい。ジェシカは祖父とアランさえそばにいれば、幸せだった。そしてある嵐の夜……。

第一話（前書き）

急にファンタジーっぽいものが書きたくなりました。（*^|^*）

ジェシカ視点

第一話

小さな部屋の窓から見える景色は一面の海と、天気が良くて空気が澄んでいるときでさえもかすかにしか見えない対岸の街並み。

家事と勉強、ささやかな野菜畑の世話を終えた後、わたしは飽きることなく、窓からの景色を楽しむ。

時々通りかかる船の姿を目で追い、岸壁に打ち寄せる波の音やカモメの鳴き声を聞きながら。

そうしていると、一日の大半があっという間に過ぎてしまうのだ。

わたしが、この古くて大きな灯台に移り住んだのは、6歳の冬だった。

両親を事故で亡くし、たった一人の身寄りには、孤島の灯台守である、母方の祖父だった。

何度か顔を見たことがあるものの、幼いわたしにとって、寡黙な祖父はそれは恐ろしくよそよそしく感じられ、夜毎母の温もりを求めて泣きあかした。

それでもいつしか、子供特有の順応性を発揮して、二人っきりの世界を楽しむことを覚えていった。

祖父は、最愛の妻であるわたしの祖母を病気で亡くして以来、人とかかわりを嫌い、灯台守の職を得てここに移り住んだらしい。わたしが生まれる何年も前のことだそうだ。

このあたりの海は昔から天候が変わりやすく、遭難する船が後を絶たなかったらしい。

島はごつごつした岩が多く、小さな港からちっぽけな手すりのついた階段がくねくねと延びており、島の頂上にそびえる灯台へと続いている。

祖父は無口だが、とても思慮深く穏やかな人で、わたしがこの島で快適に過ごせるようにいつも気遣ってくれた。だから、対岸の都会に住みたいなど一度も思ったことは無かった。

週に一度、天気良ければ、祖父と二人で船に乗り対岸の街へ買出しに出かける。

島では、豊富に魚が採れ、そして裏庭でニワトリを飼い、野菜も自分たちの食べるくらいは作っているので、それ以外の食材や生活必需品、新聞・本等を買求めた。

わたしは学校に通わずに、通信教材で祖父に勉強を教えてもらうことになった。

外国船の船長をしていた祖父は、教養があり、いくつか外国語も話せた。

勉強に飽きると、わたしはいつも祖父に遠くの国のお話をねだった。

普段無口な祖父は、案外話が上手で、いつの間にかわたしまで見知らぬ国を訪れている気分になったものだ。

「ジェシー、来てごらん、今日は大物が網にかかったようだ。」

祖父と暮らし始めて7年が過ぎ、わたしは13歳になっていた。

急いで海岸に降りると、そこには興奮気味の祖父と、網に絡まってもがいているシャチの子供。

泳いでいるのを遠くから見たことはあったが、近くで見るととても大きく、迫力がある。

「おじいちゃん、さすがにこれは食べないでしょう？放してあげて。」

「こいつはまだ小さいが、シャチは海の暴れん坊なんだよ。魚は食い荒らすし、時には船とぶつかってひっくり返したりもするんだよ。」祖父は、網の中で暴れまくっている獲物を処分するつもりでいるらしい。

「身体が大きくなれば、食べる量が増えるのは仕方ないでしょう？わたしたちだつて海から魚を分けてもらってるじゃないの。……まだ子供なんでしょう？お父さんとお母さんがこの海のどこかで心配してるわ。お願い、海に帰してあげて。」この生命の塊のような、大きくて美しい存在を、わたしはどうしても助けたくなくなった。

必死の懇願に、最初は渋い顔をしていた祖父も、可愛い孫娘の目に

浮かんだ涙にほだされ、せっかくの獲物から網をそつと外し、海に逃がしてやることにした。

幸い致命的な怪我をしていたわけではないので、シャチの子供はあつという間に海岸から遠ざかりすぐに見えなくなった。

「やれやれ、今夜は嵐になりそうだ。今日は野菜と豆がたっぷり入ったスープを作ってくれないか。」祖父は孫娘の頭に大きな手を乗せて、微笑んだ。

成長するにつれ、孫娘はどんどん美しくなっていく。プラチナブロンドの髪と、亡くなった妻にそっくりな大きな優しいグレーの瞳。

それから数日して、わたしに初めてのお友達が出来た。

いつものように家事と勉強を終え、お昼を済ませた後、わたしは一人で海岸沿いを散歩していた。

秋も深まり、風も冷たくなってきたのでわたしは去年祖父にプレゼントしてもらった赤いジャケットを、お気に入りの白いセーターの上に着ていた。

「こんにちわ、お嬢さん。気持ちの良い天気だね。」

ポカポカと日当たりのよい、お気に入りの岩に腰掛けて、水平線を見つめていたわたしは、突然声を掛けられて、思わず岩から転げ落ちそうになるほど驚いた。

「っ！！！！！？？？　こ、こんにちわ。　あの、だれ・・・ですか？」
振り向くと、わたしと同年くらいの男の子が立っていた。

ローゲージ編みの黒いセーターにジーンズ、黒い革のブーツを履いている。

まっ黒の髪は、少し長めで軽く毛先がカールしている。形の良い眉と髪と同じく黒い瞳がきらきら輝いている。　少し大きめの口でにこっと笑いかけてくる。

週に一度、祖父と街へ船で買出しに出かける時と、時折島を訪れる漁師や祖父の友人以外とは話をしたことも無く、元来の引つ込みじあんも相まって、わたしには友達と呼べる存在が居なかった。

当然、同じ年頃の男の子とも話をしたことも無く、驚きと戸惑い、そして恥ずかしさで頬が一気に熱くなった。

「俺は、アラン。この近くに住んでる。」

近く・・・？？？　この島は孤島で、周り360度には、何も無い。船で一時間ほどかかる対岸の街以外人が住む場所は無く、”近く”という表現がよくわからなかった。

アランはわたしの方に手を差し出した。アランに”近く”の意味を聞こうと思っていたのに、気がつくとなわたしはその手を握っていた。

アランの笑みがますます大きくなる。とても嬉しそうに、首をかしてわたしの顔を見ている。

「わたしは、ジエシカ。 おじいちゃんは、ジエシーって呼んでるけど。」

「ジエシー。可愛い。名前も可愛い。」アランは、いかにも慣れた感じでウインクしてきた。

「……ありがとう。」予期せぬほめ言葉に、お礼を言うのが精いっぱい。 耳まで真っ赤になっていたと思う。

わたしの手を包むアランの手は大きくて、力強くて温かった。

手をつないだまま、わたしの案内で2人は島を散策した。

一生分のおしゃべりをしたかと思うほど、わたしは話続けた。 島での生活、将来の夢……。

人見知りで、恥ずかしがり屋のはずなのに、初対面の相手にこれほど瞬時に心を許すなんて、自分でも信じられなかったが、アランの黒い瞳はどこまでも優しく、わたしの話をいつまでも楽しそうに聞いてくれた。

水平線の向こうに太陽が沈んでいくのを2人で見守る。

わたしはアランを夕食に誘った。結局どこのだれかわからないままだったが、この島にはわたしと祖父の住む灯台以外に建物は無い。

「俺の家族が心配してるだろうから、今日のところは帰るよ。そろそろ迎えが来るころだから。」

アランは残念そうにため息をつく、わたしの頬をそつとなでた。

わたしは急に不安になった。もしかして、自分の事ばかり話して、呆れられたんじゃないか。学校にも行ってないわたしの話はずまらなかつたんじゃないか。

彼は二度とわたしに会いに来てくれないんじゃないか。アランの顔をじつと見つめると、彼は少し困ったように眉をひそめた。

「そんな顔しないで、可愛いジエシー。すぐは無理だけど、また会いにくるよ。暗くなる前に、家に帰りなさい。」

「今日はわたしばかり話してごめんなさい。アランの事もっと知りたい。こんなに楽しかったことなんて無いもの。わたし、待つてるから、絶対に待つてるから、必ず会いに来てね。」

「約束するよ。……そしてこれは、約束のしるしだよ。」そう言っ、わたしの手にキラキラ光る髪留めを乗せた。

大粒の真珠とルビーが連なる、素晴らしく高価な贈り物。

「アラン? ……こんなの、わたし頂けないよ。」慌ててアランの手に戻そうとするが、アランは笑って首を振り、わたしの髪につけてくれた。

その時、アランの吐く息が、わたしの頬を掠めた。

「綺麗だ。ほら、君の赤い上着によく似合うよ。次は何か他の物を

もってこよう。「そう言っつて、いたずらっぽく笑ってまたウインクした。

こんな島にわざわざ迎えが来るとか、初対面の相手にボンと気前よく宝石をプレゼントするとか、彼はもしかしたら、とんでもないお金持ちの息子かもしれない。

そんなことを考えながら、アランにせかさされるまま、一人家路を急いだ。こんな時間まで外に居たことはかつて無かったので、祖父はさぞかし心配しているだろう。

別れ際、アランは真剣な顔で、自分の事は、祖父には内緒にするようにと言った。祖父に知られたら、自由にジェシーを訪れるのは難しくなると言われると、彼の言葉にうなずくしかなかった。

時は穏やかに過ぎて行った。わたしが成長するにつれ、祖父は年老いていく。

気がつくくと、祖父の髪の毛は真っ白になり、背中も丸くなった気がする。寒い日には、こっそり神経痛の薬を飲んでるようだ。

約束通り、週に一度くらいの頻度で、アランはわたしに会いに来てくれた。

2人が出会ってから3年が過ぎ、今では心の底から大事な友達と言える存在になっていた。

アランがいなければ、わたしは孤独の中でどこか壊れた人間になっていたかもしれない。祖父と二人の生活は何よりもかけがえのないものであったが、それでもわたしはいつもアランの事を考えていた。

2人で過ごす時間はいつもあつという間で、わたしは誰にも話せない胸の内を何もかも打ち明けた。

彼はいつも黒い瞳を輝かせてわたしの話を聞いてくれて、そして自分の迎えが来る前にわたしを家に戻した。初めて会った時のように、別れ際に、高価なものをプレゼントする事もあった。祖父に見せるわけにもいかず、わたしは母の形見のジュエリーボックスに貰ったものを大切にしまいこんだ。

彼の話信じるならば、彼は対岸の街に住む、普通の（ここはわたしには大いに疑問だった）少年で、父親は漁師ではないが、船を沢山所有しているそうだ。父親が趣味の釣りに出かける際に、この島まで乗せてもらっていると聞いていたが、わたしは彼の父の船を見たことも無く、ましてや彼の父に会ったことも無かった。

わたしはいつでも彼の話を聞きたがったが、彼は自分の事を語るのはあまり好きではないようだった。

いつか彼の家にも遊びに行きたい。彼を祖父に紹介したい。そんなことを夢見ながらも、無理にねだるような事はしなかった。アランが困った顔をするのがわかっていたから。結局のところ、わたしは彼に会えればそれで満足だったのだ。

アランの体つきは、初めて会った頃よりも数段がっしりと大きくな

り、力強い顎の線や、自信たつぷりの立ち振る舞いは、見ていてほ
れられするほどだ。

彼に対する私の気持ちには、もしかしたら友情だけではなく、いつ
しか恋と呼ばれるものが育ち始めていたのだろうか。

この島のいたるところに咲く、白く可憐な花が揺れる静かな草地で、
わたしたちはいつものように海に向かって並んで座る。

ここは2人の秘密の場所。

アランの手はわたしの小さな手をすっぽりと包みこんでいる。

「今度の誕生日に、おじいちゃんが子猫をプレゼントしてくれるっ
て。」アランのために焼いたクッキーの入った袋をあけて、差し出
した。

「そうか、ジェシーは17歳になるんだね。」アランはあいている
手でクッキーをつまんで口に放り込んだ。美味しいねと微笑んでく
れるのが嬉しい。

「そうなの。アランと一緒にの年になるね。」

「誕生日のプレゼント、何が良い？」

「誕生日じゃなくても、アランはしょっちゅう何かすごく高そうな
プレゼントくれるじゃないの！わたしのためにお金を使わないでほ
しいの。わたしは欲しいものなんて無いから。」わたしは必死で首
を横に振った。

「ジェシーは可愛いから、綺麗なものを贈りたくなっちゃうんだよ。
」そう言って、二つ目のクッキーをつまむ。アランはいつも黒っぱ

い服装をしている。クッキーのかけらが、上等の黒いセーターにパラパラと落ちた。

6月も終わりに近づき、海からの風が心地よい。

夏になると、わたしたちは海で泳いだ。一人では危険だから絶対に泳がないようにと、アランは何度もわたしに言い聞かせた。彼はとても泳ぎが上手く、わたしは全然ついていけなかった。泳ぎ疲れた後は、暖かい草地に寝そべて、うとうとと昼寝をしたものだ。

そんなことを思い出しながら、わたしはアランの端正な横顔を見つめていた。

「わたしね、眠る前に神様にお祈りするときに、いつも同じことをお願いするの。おじいちゃんがいままで元気でいますように。それから、ずっとアランと仲良くいられますようにって。」

言ってしまうと、急に恥ずかしくなった。アランはいつもわたしを可愛いとか、綺麗だとか言ってくれるけど、わたしが彼の事をどう思っているかなんて口に出したことはなかったから。

優しくて、聞き上手で、ハンサムな彼の事だ。街に戻れば、お洒落で楽しい都会育ちの女の子が沢山まわりを取り囲んでいることだろう。

それにひきかえ、わたしは世間知らずで何の取り柄も無い女の子。電車に乗った事も無いし、映画を見たことも無い。家には古いラジオだけで、テレビも無いのだ。流行の服装などわからないし、お化粧品にも縁が無い。こんなわたしという、アランは本当に楽しいの

だろうか。

いつまでもわたしに会いに来てくれる保障など無い。ましてや、わたしは彼の家も、電話番号も知らないのだ。

そう考えると、急にのどの奥が締め付けられて、涙があふれてきた。

「何も要らないの。ただ、アランがこうやって会いに来てくれるだけで良いの。わがままかもしれないけど、アランに会えなくなると思っただけで、目の前が真っ暗になっちゃうの。どうしていいかわからなくなっちゃうの。お願いだから、突然消えたりしないでね。」

「ああ勿論。ジェシーが望むなら、俺はずっとそばにいるよ。約束する。だから、泣かないで。今まで俺が約束を守らなかつたことなんて、無いだろ？」アランは親指でわたしの涙をぬぐいながら、まるで小さな子供を慰めるような口調でそう言った。

湿っぽい場面はすぐに去り、わたしたちはいつものように笑いあって過ごした。アランが約束を破った事は無い。

わたしはとても幸せな気分になっていた。

第二話（前書き）

ジエシカ視点

第二話

その夜、わたしは暖炉の前のラグに胡坐をかいて座り、飼猫のポーシャにブラッシングしていた。

茶トラでタレ耳のポーシャは、甘えん坊の女の子で、首に結んでいるピンクのリボンは例のごとくアランからのプレゼントだった。

嵐が近付いているので、祖父は少しピリピリしていた。

ブラシをかけられてすっかり眠くなってしまったのか、いつもの柔らかなクッションの上でポーシャが丸くなったので、わたしは祖父のためにウイスキーがたっぷり入った紅茶を入れようと台所に向かった。

お湯が湧くのを待っている時、ドンドンドン！と玄関のドアが乱暴に叩かれる音がして、続いて祖父と別の男性の声が聞こえてきた。何事かと、わたしも急いで玄関に走って行った。

そこには、全身ずぶぬれの背の高い男の人が立っていた。途方に暮れたような顔をして、荒い息をして震えている。茶色の髪からは、水がぽとぽと落ちていて、足元の床も水浸しになっていた。

「ジェシー、この人が使う、タオルと適当な着替えを持ってきてくれないか？」祖父が振り向いてわたしに話しかける。

わたしは急いで清潔なタオルと、祖父のタンスから着心地のよさそうな服を選んだ。

タオルと着替えを祖父に渡すと、祖父はすぐに彼をバスルームに連

れて行った。温かいシャワーを浴びるように告げているようだ。

「沖で嵐に気付いて、街に戻ろうとしたとき、船の調子が悪くなったらしい。灯台の光を指してなんとかここまでたどり着いたそうだ。全く運の良い人だ。」祖父は彼の事をそう説明すると、わたしに温かい食べ物と飲み物を用意するように言った。

「これは、わたしの孫娘、ジェシカです。」バスルームから乾いた服を着て出てきた彼に、祖父はわたしを紹介した。

人懐っこそうな焦げ茶色の瞳を見上げた時、雷に打たれたように心臓がどきりとした。

「リースと申します。こんな夜遅くに、迷惑かけてすまなかったね。」低音の柔らかな話し方は、わたしのような世間知らずでもはつきりとわかるほど、上流階級のアクセントだった。

「とんでもありません。リースさんが助かって本当に良かったです。あの・・・お口に合うかわかりませんが、スープを用意しましたので、もしよろしければ・・・。」
わたし、ちゃんと話せてるかしら？どきどきして、足が震える。

「ありがたい。早速いただくよ。」にこりと微笑みかけられて、一瞬地面がぐらつと揺れた気がした。

思い返せば、わたしはその瞬間に彼に恋をしてしまったのかもしれない。

リースは本当にハンサムだった。まるで母がコレクションしていた、

ハッピーエンドの恋愛小説に出てくる王子様のよう。（最近わたしはそれを物置で発見して、祖父に内緒でこっそり読んでいるのだ）
つやつやの茶色の髪の毛は、柔らかそうにウエーブがかかっている、良く笑うのだろう、目元にはかすかに笑い皺があった。素朴な祖父のブルーのシャツも、彼が着ると一流ブランドのお洒落な服に見えた。

遅い夕食をとる間、彼は祖父とわたしに自分の事を話してくれた。

25歳だという彼は、大学を卒業した後、銀行家の父について、見習いのような仕事をしているらしい。ゆくゆくは父親のあとを継ぐ予定とのことだ。

暖炉の火の光を受けて、リースの髪の毛がつつやと輝いている。
うつとりと彼に見とれていた自分に気付いて、わたしは落ち着かなくなった。

急いで立ち上がると、「スープのお代りはいかがですか？」と彼に尋ねた。

しゃんとしなければ。

彼は都会に住む大人で、代々銀行家の家の一人息子なのだ。ポカんと口を開けて見とれて良い相手じゃない。

なぜいけないの？ いいじゃないの。こっそり見つめるくらいなら。

彼がここに居る間くらい、あこがれの気持ちを持ったって、彼に迷

惑がかかるわけじゃないし。

それに嵐がおさまって、彼がここを去ったら、もう二度と会わないだし。

100歩譲って、偶然街のどこかで再会したとしても、わたしは相変わらず地味な格好で気付いてさえも貰えないだろうし、彼の隣には、彼にお似合いの綺麗で知的で洗練された女性がいるはずだ。

彼はスープのお代りは断ったが、代わりに紅茶をもう一杯頂けないかと答えた。

祖父は、彼の紅茶のカップにもたっぷりとウイスキーを注いだ。

眠っていたポーシャがわたしの前を通り過ぎ、甘えるようにリースの足に身体を何度かこすりつけた。

「可愛いね。君の猫かい？」

「はい。祖父がプレゼントしてくれたんです。誕生日に。ポーシヤと言います。」

「素敵なプレゼントだね。君はいくつなんだい？お嬢さん。」

「先月17になりました。」

アランは、17歳の誕生日に、17粒のダイヤモンドがついたブレスレットをプレゼントしてくれた。

その輝きは、夜空の星を全部集めたかのようで、わたしはもったい

なくて、どうしていいかわからなかった。あれほどものは要らないと言ったのに、アランはいつでもわたしに甘過ぎるのだ。

リースは、ポーシャを慣れた手つきで抱き上げて、膝に乗せて優しく背中をなで始めた。

わたしは一瞬ポーシャに嫉妬した。

「女性に年齢を訊くなんて不作法な真似をしてしまったね。」

「そんな。」女性”扱”いされて、頬がかつと熱くなる。

「君の瞳の色は、珍しい色だね。今日は一日中、海とにらめっこしていたけど、嵐が近づいてきたときの海が、確かそんな色だったよ。うな気がするよ。」

「海の色……ですか？」

「うん。じっと見つめてたら、溺れそうになる。」リースの声が一瞬と低くなったような気がして、わたしの身体はしびれてしまったかのように動けなくなった。

安楽椅子に腰掛けていた祖父が、ゆつくりと立ち上がり、お疲れでしょうからそろそろ寢室にご案内しますとリースに声を掛けた。

リースは立ちあがって、わたしの腕の中にポーシャを戻すと、礼儀正しくお休みなさいと言って、客室に消えた。

わたしは眠る前に、いつもミルクを温めそれにたっぷりと蜂蜜を入れて飲んでいる。

湯気の出ている小さな鍋からミルクを自分のカップに注いでいるとき、祖父が遠慮がちに台所に入ってきた。

リースに対するわたしの反応の事で、何か言われるかと思って身構えたが、祖父はそのことには触れず、ただ一言、今夜は少し冷えるから温かくしてお休みとだけ告げて、自室に戻って行った。

祖父の考えていることは言われなくてもわかつている。

リースは上流階級の人間で、わたしとは縁のない世界の人だということ。

祖父がそれを声に出さないでいてくれたことを、しみじみ有難いと思った。

もしはつきりと告げられたら、そしてその声にほんの少しでも憐みを感じ取ってしまったら、あまりにもみじめで、我慢できずに泣いてしまったかも知れないから。

祖父にはわたしの泣き顔を見られたくなかった。祖父の心の負担になるような真似だけは出来ないと思った。

でもアランなら。

わたしはそつと溜息をついた。

アランの前でなら、わたしはいつでも本当の気持ちと言える。

アランに急に会いたくなつた。

今の気持ちを全部訊いてほしかった。

ねえ、信じられる？

一目惚れなんて、小説の中か映画の中でしか起こらないと思つたの。

アランにそんな話をしている自分が目に浮かぶ。

いまだに彼の連絡先を知らないわたしは、天候が悪いならなおさら会えるのはずいぶん先だろうと思つて、ますます落ち込んでしまつた。

荒れた天気がおさまるのに3日、リースの豪華なクーラーザーを修理するのに2日かかった。

その間、わたしは殆んど食事のどを通らず、それでも妙に浮足立つた気持ちで毎日を送つた。

リースが笑いかけてくれるだけで、周りの世界が急に色めき立つのだ。それでも祖父の少し心配そうな顔に気付く度に、ちゃんと自分の立場をわきまえないと気を引き締めた。

気さくなリースはとても話上手で、驚いたことに料理も相当な腕前だった。

大学生のときに一人暮らしをしていて、その時に料理に目覚めたらしい。

裏庭の野菜畑と一緒に野菜を収穫したり、リースから新しいレシピを教わるのはとても楽しかった。

天候が安定した日に、もしかしたらアランに会えるかもと、いつもの岩場に行ってみたが、一時間近く待っていても、彼は現れず、わたしはあきらめて家に戻った。

「本当にお世話になりました。この灯台の光が目に入らなかつたら、僕は今頃生きて無かつたでしょう。感謝してもしきれない。」

リースが祖父とがちりと固い握手をしている。リースのクルーザーは、すっかり元通りにメンテナンスされ、後はこの島を離れるばかりである。

リースは出身大学のロゴが入った白いTシャツの上に、紺色のパーカーを羽織って、カーキ色のハーフパンツを履いている。

嵐が収まった後、わたしはクルーザーに残してあった彼のずぶぬれの荷物を、まるごと全部洗濯して乾かしたのだ。

祖父と握手を交わした後、リースがわたしの方に振り向いた。

いつもの優しい笑顔が眩しすぎる。

「ジェシカ……。僕の大事なお嬢さん。本当にありがとう。君に会えて、僕は。」

わたしはリースをじっと見上げた。笑顔を作ろうとして、見事に失敗してしまった。

ポロリと涙がこぼれて、慌てて袖で拭った。しゃくりあげそうになって、慌てて息を止める。

「どうぞお元気で。さようなら。」

それだけ言うのが精いっぱい、その時リースがどんな顔をして自分を見つめているかわからなかった。

くるとリースに背を向けると、灯台の上って行く階段を一気に駆け上がった。

波の音と、カモメの鳴き声に混じって、リースがわたしの名前を叫ぶ声が聞こえたような気がしたが、それを確かめる勇氣は無く、ただただひたすら全力で走った。

大声で泣きたかった。誰もいない場所で。

うんと遠く離れた場所に行きたかった。

この小さな島の港から。

爽やかな顔を申し訳なさそうにくもらせたリースから。

わたしからリースを奪っていく、リースのクルーザーから。

そして、辛そうに、わたしを見つめる祖父のまなざしから。

いつもアランと2人でおしゃべりしながら海を眺めていた草地にたどり着くと、そこにはアランが居て、わたしの泣き顔を見て顔をしかめた。

「ジェシー。」ここへおいでというふうに、両手を広げている。

アランの温かい腕の中に飛び込んだ。

「あの人が……。リースが行ってしまったの。もう会えないの。それなのに、ちゃんとお別れ言えなかった。最後にありがとって言いたかったのに。途中で泣いちゃって、そのままここまで走ってきたの。」

「好きなの？彼の事が。」

「ひ、一目惚れ？……。なのかな？ おかしいね。彼の事殆んど知らないのに、頭がぼーっとなっちゃって。切なくて気持ちが不安定になって。」

「そう。」

「苦しいの。胸が苦しくて、すぐにアランに話を聞いてもらいたかったけど、会えなくて。誰にも言えなかったから余計苦しかったよ。」

「ごめんね。すぐに会いに来れたらよかったね。」アランは少し悲しそうな顔で、わたしの髪を撫でている。

「うっん。気にしないで。アランだって、忙しいでしょう。それにね、今日だって、会えるなんて思ってなかったのよ。……だからいつそう嬉しい。会いに来てくれて、ありがとう。」アランにしがみつく腕にギュッと力をこめた。

「俺も嬉しいよ。俺のジェシーがやっと笑ってくれたから。」いつも優しいアランに似合わない皮肉な口調に、わたしはハツとした。

「アラン……?」

「アイツなんかには渡さないよ。ジェシーはずっと俺のそばに居るんだ。ジェシーだってそう言ってたじゃないか。俺のそばに居たいって。そうだろ?」

「え?」

「ジェシーは俺の事だけ見てれば良いんだよ。アイツなんかより俺の事を好きになってよ。」

「アランの事は大好きだよ。わたしはいつもアランの事思ってるの。」

「友達のようにか?それとも兄貴のようにか?……違う。それじゃ足りないよ。今まではそれでも良いって思ってた。でももう駄目だ。ちゃんと見てよ。男として。俺の事を。」

「わからないよ。急にそんなこと言われても。だってアランは13の頃からずっと一緒に。」

「俺は最初から好きだったよ。ジェシーの事が。誰よりも愛してる。」

アイツじゃなくて俺を見てよ。」

わたしは、途方に暮れた。

2人は、出会ってからずっと無二の親友だった。

今朝、リースが島を去って行ったことは確かに心底辛い事だけれども、それでもアランに二度と会えないと告げられるよりは、ダメージは小さいと確信できる。

アランとリース、どちらに対する愛が深いかと言えば、勿論アランに対する気持ちの方が大きくて深いのだ。

けれどもそれが男として愛してるのかと問われると、わたしには判断がつかなかった。

今自分が持てあましている、リースへの恋心と、少女のころから抱いてきた揺るがないアランへの親しみや愛情はやはりどこか違うような気がするのだ。

「アランの事好きだよ。私にはアランしかないの。だから、嫌いにならないで。」アランの気持ちに答えられなければ、見捨てられるような気がして、急に怖くなった。

「ジェシー、泣かせるつもりはなかったんだ。ただ、俺をちゃんと見て欲しくて。」

「見てるよ。だから、消えたりしないで。もう会わないなんて言わないで。アランに会えなくなっちゃったら、どうしていいかわかん

ないよ。」

「そんなことするもんか。ずっとそばに居るから。アイツの事は忘れるんだ。・・・わかったな？」

「わかってる。忘れるも何も、もう二度と会うことは無いの。初めから、かなわない相手だったの。住む世界がちがうんだよ。」

「ジェシーはアイツにはもったいないくらいの女の子だよ。可愛くて・・・、クッキーを上手に作れて・・・、働
き者で・・・、優しくて・・・。」

「ふふふつ。そんなに褒めても何も出ないよ。でも、次会うときは、アランのために、クッキー沢山焼いておかないとね。」

「え？ばれちゃった？何しろ俺は、ジェシーの焼いたクッキーがこの世で一番大好物なんだから。」アランはいつものように、ニヤリと笑ってウインクしてくれた。

アランは昔からわたしを泣きやませるのが上手い。

夕暮れの中一人で帰途につきながら、今は辛いけど、アランと過ごすうちに、いつかは失恋の傷も癒えるだろうと考えていた。

そう。元の世界に戻っただけ。

おじいちゃんと、わたしと、そしてアラン。

確かにそれで充分幸せだったんだから。

第三話（前書き）

アラン視点っぽい三人称

第三話

「申し訳ありません。僕はお嬢さんを泣かせてしまったようです。」
細い階段を駆け上がるジェシカの後ろ姿が見えなくなった後、リースはジェシカの祖父であるタイラーに頭を下げた。何度か名前を呼びかけたが、彼女は一度も振り返ることなく行ってしまったのだ。

「気にしないでください。私が悪いのです。……自分の都合を優先して、世間から隔離するような育て方をしてしまいました。年齢の近いあなたに仲良くしていただいて、別れが辛くなったのでしょう。仕方ありません。」

「僕にとっても、彼女との時間は、大げさかもしれませんが、今まで経験したことのない程、心満たされるひと時でした。タイラーさん、不謹慎かもしれませんが、僕は嵐に巻き込まれて、むしろラッキーだったと思っています。ここでの生活は、毎日仕事に追われて過ごすうちに見失っていた大切なものを思い出させてくれました。そして、命の危機を身近に感じたことで、それまで悩んでいたことに対する答えを見つけることも出来たんです。」

「それならばリース、どうか神様に助けられた命を、大切になさって、世の中のために役立ててください。」

「肝に銘じておきます。……最後に一つだけお願いがあります。タイラーさん、どうか僕に今回のお礼をさせて頂きたいのです。」

「お礼など必要ありませんよ。これが私の仕事の一番重要な役割で

すし。どうぞお気になさらないでください。」

「いいえ、それでは僕の気がおさまりません。今度街にいらっしやつたときに、我が家に招待させて頂けませんか？僕の家族もお二人に直接お礼が言いたいでしょから。」

「お気持ちだけで結構です。お察し下さい。ジェシーも私も知らない人に会うのが苦手です。」

「それでしたらなおさら、お孫さんのためにも是非ともYESとおっしゃって下さい。僕の妹は、確かジェシカよりふたつほど年が上なだけです。同じ年頃の友人を持つ事は、今の彼女に一番必要なことではありませんか？」

「さすが銀行家ですね。説得が上手だ。ええ。確かに、孫娘には、なによりも友達が必要だと思います。・・・それに、私もこの通りいつまで生きられるかわからない。今のうちに、独り立ちの準備をさせなければと考えております。」

「勿論、もし彼女が街で暮らすようなことがあれば、喜んで僕も僕の家族も全面的にサポートさせていただきますよ。・・・じゃあ、決まりですね。では、来週の土曜日はどうでしょう。楽しみにしています。ああ、連絡先は御存じですね。招待をお受け頂いてありがとうございます。どうぞいます。では、ジェシカによくお伝えください。」

リースは意気揚々とクルーザーに乗り込むと、タイラーに手を振って、島を去って行った。

リースのクルーザーが一直線に対岸に戻って行くのを、ジェシカはただ黙って、アランの腕に寄りかかったまま、いつもの草地から見

送っていた。

その日、夕暮れすぎて帰宅した孫娘に、タイラーは何も言わなかった。リースが招待の約束を反故にするようなことは無いとは思ったが、何かの都合で万が一駄目になったらと思うと、孫娘に要らぬ期待を抱かせるのは酷だと考えたのだ。

ジェシカは散々泣きはらしたような目をしていたが、その表情は意外なほど穏やかで、リースとの別れの場面で見せたような取り乱した様子は見受けられなかった。

タイラーは心の中で安堵のため息をついた。

妻の亡き後、灯台守として、半分世捨て人のような暮らしをしてきたのは彼の選択であり、決して後悔はしていない。ただ、ジェシカのこれからの人生は今まで以上に幸せなものであって欲しい。

そして、そのためには、こんな孤島に縛りつけておかずに、そろそろ彼女を対岸の街に送り出さなければ。そこで、いろんな人と出会い、楽しいこと、辛いことも含めて様々なことを経験し、成長し、そして自分自身の人生を築いていくべきなのだ。

彼の愛する孫娘は、外見だけでなく内面の美しさがにじみ出るような素晴らしい女性になりつつある。ただ、人の悪意や世の中の醜い面を知らなすぎで、自分が亡くなった後、一人で生きて行くにはあまりにも素直で純粹過ぎるだろう。それが彼のたった一つの心配ごとであり、心残りでもあった。

帰宅したリースが一番に取った行動は、父親に会うことだった。

スーツに着替えると、リースが無事に戻ってきたことを喜ぶ母や妹に簡単に事情を説明した後、すぐに父のオフィスに向かった。

「お父さん、話があります。」落ち着いた雰囲気の間々とした父のオフィスに入ると、リースはすぐに切り出した。

海が一望できる高層ビルの上層階の一室に、父親のオフィスはある。リース自身のオフィスも同じ階にある。

「リース、無事な姿を自分の目で見るまでは、心配で仕方なかったよ。本当に良かった。どこにも怪我はないのかい？」持ち上げた受話器を元に戻すと、父親は満面の笑みを浮かべて息子を迎えた。

「おかげさまで。いや、それどころか、ここを出発した時よりも健康になって戻って来ました。」リースは思わず微笑んだ。ジェシカの作った素朴な料理は、どれも美味しく、つつい食べ過ぎてしまっくらいだった。普段ならまだ仕事をしているような時間に眠りにつき、日の出とともに起きる。そんな島での生活の中で、日々のストレスで疲れ切っていたリースは身も心もすっかり癒されていた。

「それは良かった。・・・ところで、なんの話だ？」

「はい。突然ですが、僕は、メラニーとの婚約を破棄するつもりです。」

「な、何を言い出すんだっ！」

「彼女の事は、幼馴染でもあるし、ある種の愛情を感じてはいます。教養もあるし、あの通り美人でもある。……でもそれだけで結婚しても良いのかと心のどこかでずつと違和感を感じてました。クルーザーで沖に出て、静かな環境で独りになってじっくり考えようと思っていたら、今回の嵐に巻き込まれ……。その時思ったんです。もし命が助かるなら、これからは自分に正直に生きよう。絶対に後悔しない生き方をしよう。僕はメラニーに婚約解消を申し入れる決心をしたんです。そして、たどり着いた島である女性に出会いました。……。僕は、その女性を、ジェシカを好きになりました。ジェシカに対する気持ちは、今までどんな女性にも抱いたことのないものです。すべてが片付いたら、僕はすぐにでもジェシカに結婚を申し込むつもりです。」

「そんなの一時の気の迷いだ。いや、いわゆるマリッジブルーと言うべきか。メラニーの家族とは、殆んど親戚のようなものじゃないか。私も、彼女の父親もこれ以上のお似合いのカップルは無いと思っっている。お前もこれまでそれを嫌がるそぶりなんて見せなかったのに。それをいまさら、彼女を裏切って、他の女性と結婚するなんて、許されないよ。」

「何と言われようと、無理なものは無理です。メラニーだって、他の女性に心を奪われた僕との結婚を喜ぶとは思えません。それこそ彼女に対して失礼だと思えます。」

「落ち着いて考えてみる。一体誰なんだ。その女性と言うのは。島で出会ったとは？あそこは確か古い灯台しかないだろう？」

「ジェシカは僕が助けてもらった灯台守のタイラーさんの孫娘です。ご両親は、彼女が幼いころに事故で亡くなったそうです。」

「灯台守の？それならば、余計賛成するわけにはいかないよ。そんな女性に婚約者を奪われたなんて知ったら、メラニーはこの街で生きていけないだろう。」

「そんな女性」とはどういう意味でしょうか。お父さんは、ジェシカの事を知りもしないで。もう決めたんです。僕はどうしても彼女と結婚したい。メラニーには、これからちゃんと会って、わかってもらえるまで説明するつもりです。」かっとなって思わず手を握りしめる。

「向こうはどうせ金目当てだろう。そうなんだろう？島で退屈してるときに、誘惑されただけじゃないのか。」今まで一度も親に逆らったことなど無かった優等生の息子が一体どうしてしまったのか、父親は動揺を隠せない。

「僕の大事な人を侮辱するなんて、たとえ自分の父親であっても許さない。あの二人にはそれなりの敬意を払って頂きます。それから、早速来週の土曜日、ジェシカと祖父のタイラー氏を食事に招待しましたから、ご自分の目で確かめてください。金目的とか、誘惑とか、そんな言葉を口にしたご自分を存分に恥じることになりませんよ。」息子の目が激しい怒りをたたえながらも、かつて無いほど冷淡に光るのを、父親は茫然としながら見つめていた。

「お前は、いったいどうしたんだ。親に対して、なんて口のきき方を。」

「ああ、もうひとつ言い忘れてました。僕を育ててくれた両親には

深く感謝しております。が、これからはもつと自分の気持ちを優先
することにしました。もう僕はあなたの言いなりにはなりません。
もし、解雇するならばどうぞなさってください。この街から出て行
くことも、やぶさかではありません。ジエシカー人くらい、どこに
住もうが、どんなことをしても食べさせる自信はありますから。」

リースはそう言い残すと、息子のあまりの変貌ぶりに、ポカンと口
を開けたままの父親を残して、オフィスを後にした。

第四話（前書き）

メラニー視点

第四話

「何言ってるの？リース……。冗談にしても笑えないし、いたい何が言いたいのか、私にはさっぱり。」メラニーが両親と住んでいるレンガ造りの大きな屋敷の応接室は、海に面した広いバルコニーにつながっていて、2人はそこでお茶を飲んでいた。

突然久しぶりに自分から訪ねてきてくれた婚約者の言葉を、メラニーはすぐには受け止められないでいた。シヨックのあまり頭の中が麻痺してしまつたようで、うまく働かない。

「すまない。本当に、なんて言えばいいのか。だけど、どうしてもこのまま君と結婚するわけにはいかないんだ。わかってくれないか。僕はとうとう運命の人に出会えたんだよ。」

リースは罪悪感のためか、少し眉をひそめて、真剣な顔でメラニーを見つめている。それでも”運命の人”の事を語っているときは、どこかうっとりするような目をしていた。

なんて残酷な……。メラニーの心にどす黒い感情が溢れだす。父親同士が親しい友人関係で、お互いの家族はしょっちゅう行き来していた。物心ついたときから、大きくなつたらリースのお嫁さんになるんだよと言われ続けて育ってきたのだ。

リースはどこに行つても人気者で、優しくて、ハンサムで、勉強でもスポーツでもすごく優秀で、婚約者としていつも鼻が高かった。

そろそろ結婚式の日取りを具体的に決めないとなどと、両親や周り

の友人たちにも言われ始めたところなのに。

「あなたは私にそんな仕打ちができるはずない。いまさら私たちの婚約が駄目になったりしたら、私はみんなの笑い物になってしまう。……そんなの、私には耐えられない。」友人達に陰で笑われるなんて、そんなの、絶対に嫌。悔し涙がジワリと目に浮かぶ。

「……婚約解消なんて、よくあることだよ。それよりも、お互いの気持ちに嘘をついて結婚する方が間違っているんじゃないかな。」

「私はあなたと結婚したいの！お願いっ。私のどこがいけないのかはつきり言ってくれたら直すから。何でもするから、考え直してほしいの。」リースの目をみたら、どれだけ本気がよくわかる。小さい頃から一緒に育ってきたようなものだからこそ。

何を言っても彼の気持ちは変えられないかもしれない。メラニーは絶望を通り越してパニック状態になる。

「本当のところ、彼女に会う前に既に気持ちを固めていたんだよ。君に対する愛情は、家族や友達に抱くようなもので、恋人に対する気持ちとは違うと以前からなんとなく気づいていたんだ。だから、このことは決して彼女のせいじゃないんだよ。」

「だから何なのよ？どちらにしても、私は振られてたつてことなの？酷い。私は何も悪くないのに、どうしてこんな仕打ちを受けなければならぬの？……私はあなたを絶対に許さない。あなたも、あなたを私から奪ったその女も、地獄に落ちればいいんだわ。」怒りの感情があまりにもすさまじくて、次から次へと呪いの言葉が口から出てくる。

「僕の事はいくら恨んでくれても構わない。それだけの事をしてしまったんだから。でも、彼女は何も悪くないんだ。だから、彼女にもし少しでも害を与えるようなことをしたら、僕は容赦しないから。それだけは覚えておいてくれ。じゃあ僕はもう行くよ。ご両親には僕から話をするから。」

今、目の前に居るハンサムな男は、彼女のよく知るリースじゃない。メラニーはぞつとした。こんな冷たい目をする人じゃなかったのに。彼女を護るためなら、私に危害を加えるというの？

ありえないわ。だって、彼は私のものなんだから。これまでも、これからも。

リースは席を立ち、応接室のドアに向かって歩き出した。これからメラニーの父親に会いに行くのだろうか。

「待って！！！わかった。あなたの言う通り、婚約は解消しましょう。」メラニーは慌てて椅子から立ち上がり、リースの方へ近づいた。

ドアノブに手をかけたまま、リースは振り向いた。

「メラニー？」

「ただし、今すぐにといいのは止めていただきたいの。両親にも私から話すわ。私があるあなたをその女性に奪われたなんて、絶対に思われたくないから。」私があるあなたを振ったってことにしたいの。・・・だから、今まで通り私と仲良くしてほしいの。そして少しずつ私があるあなたへの興味を失ったかのようにまわりに示すようにした

ら、私も面目を失わずに済むし、あなたの大事な人も、悪者にならなくて済むでしょ？」

「君がそう言うのなら、僕は喜んでその案に従うよ。今回の件で君の評判を傷つけずに済むのはそうするのが一番だろう。・・・本当にありがとう。君がわかってくれてどれだけ嬉しいか。」

リースはメラニーをぎゅっと抱きしめた。兄が妹に与えるようなハグだった。

「さつきはきついこと言ってごめんなさい。こんなことになってもあなたは私の大切な幼馴染に変わりないでしょ。あなたがどんな女性を選んだか知りたいし、もしできれば良いお友達になりたいわ。」

「君は本当に優しい人だね。心が広くて、そしてとても美人で。こんなに魅力的だからこそ、君の周りにはいつでも沢山ボーイフレンドがいるのも納得できるよ。」

「あら、知ってたの？でも誰とも真剣なお付き合いをしてたわけじゃないのよ。いろんなボーイフレンドと遊んだりしたのも、すべてあなたが嫉妬してくれるかなって思って。」メラニーは慌てて言い繕った。

「そうなのかい？僕はてつきり。いや別にいいんだよ。責めてるわけじゃないんだ。知ってると思うけど、僕だつてまるつきり潔白ではないし。お互い様ってことで。・・・じゃあ、これからは良き友人としてよろしく。」リースはそう言って、いたずらっぽく笑う。それはメラニーの大好きな彼の表情のひとつだった。

「・・・ええ。でも忘れないで。しばらくはまだ婚約者のふりをし

てね。」メラニーもいたずらっぽく笑い返した。たとえそれがただの作り笑いだとしても、幸せいっぱいの彼には気づかれないうら。

（私の心をずたずたにして、そう簡単に許されると思っての？）

「わかってるよ。・・・ではまた。」

「さよなら。また近いうちに。」

リースが去った後、メラニーは応接間のテーブルから煙草を取り上げて、火をつけた。

吐き出した煙を目で追いながら、ニコチンの力を借りて一心不乱にリースを取り戻す方法を考え始める。

こんなことなら、大学を卒業した後すぐにも結婚すればよかった。ただ、リースもまずは仕事をじっくり覚えたいと言っていたし、自分もその前にもっと遊びたかったのだ。

リースは確かに完璧で夫にするなら彼以外は考えられないけど、正式に結婚する前なら、こつそりと一時の火遊び程度の恋を楽しむくらいは、ばれさえしなければかまわないと思っていた。

逆に、結婚すればそんなことはおおつぴらには出来なくなるとわかっていたからこそ、次から次へと後腐れの無いような、その場限りの短い恋の相手を求めたのだ。

まさかリースがそれに気づいていたなんて、知らなかった。

かなりの誤算である。

それでもリースを諦めるつもりは毛頭無い。私は悪くない。悪いのはリースなのだ。

私が黙って身を引くと思っただら大間違いよ。

バカな男だわ。まったく。お坊ちゃまってすぐに人を信じるんだから。

メラニーはリースの間抜けぶりを鼻で笑った。

まずは、リースの言うところの”運命の相手”を排除しなければ。どんな手を使っても良い。

お金目的ならば、適当に渡して消えてもらえばいいし。

そうじゃなければ、何か別の方法をとらなければならぬだろう。

どちらにしても悩ましい事態だ。

これから忙しくなる。

メラニーは深いため息をつくとき、短くなった煙草を大理石の灰皿で
もみ消して、足早に部屋を去って行った。

第五話（前書き）

ジエシカ視点

第五話

太陽が水平線から顔を出す頃、私も暖かい寢床から抜け出して、朝食の支度を始める。

いつものように、ベットの足元から降りてきたポーシャが足にまとわりついて、ミルクをねだる。

ラジオから流れてくる曲を口ずさみながら、三つ目の卵を割ろうとして、手が止まった。

リースが居なくなつて、もう何日も過ぎたのに。

クスリと苦い笑いがこみ上げる。胸がちくりと痛むのには、もう慣れたけど。

元気かな？

もうわたしたちの事なんて、すっかり忘ちゃったよね。そうして毎日、仕事やデートで忙しくしてるだろうな。

今日は土曜日で、天気も良く、海も穏やかなので、祖父と船で対岸の街へ買出しに出かけることになった。

そしてなぜか祖父と2人で、船着き場から通いなれた市場へと続く道ではなく、普段はめったに立寄る事のない、繁華街へと向かっている。

一番賑やかな通りに出ると、一際大きな洋品店へ入って行った。

「いらつしゃいませ。」すぐにスマートな女性の店員さんが声をかけてきた。

祖父は、なじみのない雰囲気、どうしてよいかわからず縮こまっているわたしの背中を、その女性の方に押しやった。

「孫のために、何点か選んでもらえますか？ちよつとよそいきにも使えるような洋服と靴を見つくるってやってください。」

「勿論ですわ。さあ、お嬢さんどうぞこちらへ。」

仰天して固まっているわたしの腕をさつと掴んで、店員さんは店の奥の方へ連れて行った。

改めて良く見ると、今日はなぜか祖父の普段着である、古びたワイシャツと、ジーンズではなく、ぱりつとしたブルーのストライプのワイシャツと紺色の麻のズボンを履いている。焦げ茶色のブーツもピカピカに磨かれているのがちらりと見えた。ひげだっていつもより綺麗に剃っている。

それほど背は高くないが、年齢に似合わず引き締まった体つきの祖父の瞳は明るいブルーで、長年海風にさらされて、肌は赤焼けしているが、年をとった今でも十分素敵だと思った。

店員さんは、私の瞳の色と、髪の色を見て、にっこりすると、すぐきれいな藍色のワンピースを持って来た。一見シンプルな形だが、よく見ると生地のカチカチや、ギャザーのよせ方が凝っていて、試着させてもらったらサラサラと流れるようなラインがとても美しかった。

そのほかにも、白っぽいベージュのレースに、モスグリーンと黄色の小枝柄の刺繍が細かく入ったブラウスとふんわりとした淡いグレーのスカート、ラベンダー色の身体にぴったりしたシルエットのワンピース等、触れる事さえためられるような素敵な洋服を次々見せてくれた。

初めてヒールのついた靴を履いて、ドキドキしながら店の中を歩いてみる。

背中がぞくぞくするような、少しだけ大人になった気分。

次から次へと手渡された服を着たり脱いだりを繰り返したあと、祖父は何を思ったか、全部下さいと言いだしたので、私は慌てて祖父のそばに駆け寄って、腕を引っ張った。

祖父は私に、最初に試着した藍色のワンピースと、リボンのついた白いサンダルを身につけるように言うと、店員さんには、私が着ていた洋服はほかの服と一緒に包装するように頼んでいる。

おたおたしていると、別の店員さんが現れて、沢山買っていたから、サービスですよと言って、お店に展示してあった、小さな花飾りのついた髪留めを使って、腰まである長い髪の両サイドを編

んで、後ろでひとつにまとめてくれた。

「おじいちゃんっ、一体どうしちゃったの？お洋服や靴、こんなにいっぱい買いい物して、大丈夫なの？」荷物の準備が出来るのを待っている間、小声で祖父に訊ねた。

普段はバザーや、市場にある、若者向けの安売りの店で洋服を買っているのに。こんな高級なお店、おじいちゃん一体どこで知ったんだらう？

「ジェシーもそろそろ、大人の女性にふさわしい、ちゃんとしたお洒落を覚えなないとね。それにこんなの、必要最小限だよ。街に住むようになれば、こんなんじゃ足りないくらいだよ。」

「……街に住むって？どういうこと？」心臓がピクリとする。

自分の耳を疑った。

わたしたち、街に住むことになるの？

「いつまでも、こんな年寄りと二人きりで孤島に住むわけにもいかないだらう。」祖父はそう言うと、少し悲しそうに目をそらした。

あこがれのファッション雑誌から抜け出したような、上品で洒落た洋服や靴に囲まれて、浮き浮きと華やいだ気持ちになっていたのが、一気に冷める。

定員さんが、大きな包みをいくつも運んできた。祖父は支払いを済ませると、私を促してお店の外に出て、人ごみでこった返す広い通りを歩き出す。

「おじいちゃん、灯台守やめちゃうの？」祖父のかかえる大荷物を半分引き受ける。

「やめないよ。まだもう少し身体が自由に動く間は、仕事を続けた
いと思ってる。」

「じゃあ、なんで、街に住むって、どういうこと？」

「これ以上お前が寂しい思いをしなくて済むようにしたいんだよ。
いい加減、友達を作ったり、いろんな人と知りあって、自分の世界
を広げて行くべきなんだ。おじいちゃんのがままで、いつまでも
手元に置いてしまつて、申し訳ないと思ってる。・・・お前には
黙っていたんだが、実は今、知り合いにお前の仕事の口を頼んで
いる。」

「そんな・・・。島の生活は、全然寂しくなんて無い。それに、
そんな急に、嫌だよ。無理だよ。・・・わたし独りで街になんか
住めないよう。」おじいちゃんもいるし、アランもいる。そしてポ
ーシャだっている。わたしは今のままで充分幸せなのに。

「突然こんなふうに話すつもりじゃなかったんだ。びっくりさせて
しまったね。でも、おじいちゃんは何年も前から、お前が年頃にな
ったら、いつかはと覚悟してたんだ。」

祖父の口調は淡々としていて、まるで自分自身に言い聞かせるかの
ようだった。

「おじいちゃんを島に独りにはさせられないよ。わたしが居なくな
ったら、誰がご飯を作ったりするの？」最後の抵抗を試みる。

「大丈夫だよ。独りには慣れてる。．．．それに、料理や洗濯だって、ジエシーに教えたのは、この私だと言うことを忘れないでくれ。」

「でも．．．。」不安で胸が押しつぶされそうになる。

「二度と会えないわけじゃない。こうやって、毎週のようにお前にお会いにくるよ。だから、おじいちゃんに任せてくれないか。悪いようにはしないから。」

「．．．うん。おじいちゃんがそう言うなら。．．．お勤めするようになったら、お金貯めて、おじいちゃんに楽させてあげられるように頑張るね。」わたしはそう言って、祖父の腕にギュツとしがみついた。

祖父だっていつまでも働けるわけではないのだ。もっと年をとって今の仕事を引退したら、今度はわたしが働いて、面倒をみる番なのだと気がついた。それならば、いつまでも祖父に甘えているわけにはいかないのだ。

「わかってくれたんだね。」祖父はほっとした様子で、笑顔を見せてくれた。

「でも、わたしはこのとおり何もできないし。わたしなんかを雇ってくれるところなんて、見つかると思う?」試験を受けて、一年繰り上げて高校卒業の資格は取り終えていたが、それでも世間知らずの田舎者には変わりない。

「船乗り仲間のひとりが、数年前から、港湾関係の会社を経営して

るんだ。うちの孫は、いくつか外国語もできるし、タイプも打てる
と言ったら、やる気があるなら、いつでも面接してくれると言っ
ていたよ。」そう言っ、一枚の名刺を渡してくれた。

「港湾??どんな仕事なんだろう。でもわたし、出来る事なら何で
もやりますって言っ、頑張るつもりだよ。だから、心配しないで
ね、おじいちゃん。・・・それと、今日は沢山買っ、有難
う。」渡された名刺をそっ、とバックの内ポケットにしまいこんだ。

「島に戻ったら、さっ、そっ、履歴書の書き方を教えてやろう。それが
出来たら先方に連絡してみる事にするよ。」

「うん・・・わかったよ、おじいちゃん。」空元気も長くは続か
ない。具体的に履歴書とか、先方に連絡するとか言われて、内心戸
惑っている。

祖父は前から考えていたと言っ、すっ、かり根回しをして
いたようだが、わたしにとっては青天のへきれきとも言っべき事態
だ。

あまりにも急激に自分の人生が変わっ、いくような気がして、大き
な不安が押し寄せる。でも、それと同時にほんの少し、漠然とした
将来への期待が混じっている。

新しい生活、新しい出会い。わたしはどうなっ、ていくのだろう。

山のような包みを一旦置っ、たために、船に戻る事にした。

いつも利用している船着き場のすぐそばに、見慣れない車が停まっ

ていた。

私たちが近寄ると、運転席から、サングラスをかけた若い男の人がおりてきた。

少しウエーブのかかった、つやつやの茶色の髪。

うそ・・・でしょ？

サングラスを外して、笑いかけてきた顔を見て、わたしは息が止まりそうになる。

「こんにちわ。待ちきれなくて、無理やり仕事を途中で切り上げて迎えに来ました。」

ビジネススーツに身を包んだリースは、近寄りがたいほどかっこよかった。

余りにも素敵過ぎて、彼がわたしたちに、いかにも自然な様子で話しかけている事に違和感を感じてしまうほどだ。

リースは祖父と親しげに握手を交わすと、驚きのあまり動くこともしゃべる事も出来ずにいるわたしの手から洋服の包みを取り上げた。

「ジェシカ、見違えたよ。すごく大人っぽくて、最初すぐにはわからなかったくらいだ。それに、ずいぶんと沢山買いこんだようだね・・・どうした？なんでそんなにビックリした顔してるの？」

もう二度と会うことは無いと思っていた人が、こんなに近くにいて、わたしに話しかけている。

「あの、どうしてここにいらっしやるんですか？」

「どうしてって、君たちを招待したからさ。」

「招待????？」

「お世話になったお礼がてら、食事でもと、タイラーさんをお願いしたら、快く承諾してくれたんだよ。さ、車に乗って。うちの両親も、妹も君たちに会えるのを楽しみにしてるんだ。」

リースはわたしの荷物を全部車のトランクにおさめると、後部座席のドアをあけて、わたしたちを中に座らせた。

高級車の広い後部座席に座ってから、とぼけ顔の祖父を横目で睨んだら、少し困ったような笑顔がかえってきた。

祖父が前もって何も教えてくれなかったことを少しだけ恨めしく思ったが、もし初めからこの事を知っていたとしたら、私は前の晩一睡もできなかっただろう。

こうして、わたしと祖父は、リースに連れられて、リースとリースの家族が住む家へと向かうことになった。

第六話（前書き）

ジエシカ視点

第六話

リースの運転する車は、海岸通りから、繁華街を突っ切って、緑の多い山の方へとわたしたちを運んで行く。

すべるように走る車の車内は静かで、リースの趣味なのか、小さな音でクラシック音楽が流れているだけ。

わたしは車の窓の外を流れる風景をただただ見つめ続けていた。

わたしの住む島の風景とはかけ離れた、ごちゃごちゃした繁華街、整然としたオフィス街、忙しそうに歩道を行き交う人達、閑静な郊外の住宅街……。

今までこんなにじっくりと島以外の場所を見たことは無かったから。

リースの車は楽々となだらかな坂道を上って行き、そのうちわたしは、上の方に行けば行くほど、一軒一軒の間隔が広がって、建物が大きくなっていく事に気付いた。

「さあ、着いたよ。我が家へようこそ。」

高級車がいくつも並んでいるガレージの前に、リースはゆっくりと車を停めて、運転席から振り向いて、にっこり笑いかけてきた。わたしは緊張のあまりぎこちなく微笑み返すこともできないでいる。

海が一望できる高台にそびえたつ、白い壁に深緑色の屋根の大きな

邸宅。

わたしと祖父の暮らす島が遠くに小さくかすんで見えた。

屋敷の周りには芝生が青々と広がっていて、花壇の花も色とりどりに美しく咲き誇っていた。

そよ風に吹かれながら、ぼんやり景色に見とれていると、あとでゆつくり案内するけど、裏庭には、プールとテニスコートもあるんだよとリースが教えてくれた。

わたしは、振り向いてリースの顔を見上げた。

リースはお礼がしたくて、わたしたちを食事に招待したと言っていた。

こんな立派なお屋敷に住んでいる人が一体どうして。

単なる気まぐれ？ううん。リースはそんな人じゃない。

それでもリースが島に居る間、わたしたちの質素な暮らしにどうやって耐えてたのかと首をかしげたくなるほど、わたしの目に映る彼の住まいはどこもかしこも贅沢の極みのように思えた。

祖父は職務上当然のことをしたまでだし、島を去った後、リースはあれきりわたしたちに会わずに済ませることもできたのに。

これほどまでとは想像つかなかったけど、裕福で都会育ちの彼はわ

たしたちのことなど、もうすっかり忘れていると思ひ込んでいた。それなのに、実際は、こんなふうに律義に忙しい中、わざわざ時間を割いてくれている。

独りで勝手に勘違いして彼の事を決めつけていた自分が情けなくなる。彼に対して、失礼なことをしてしまったと反省した。

そうだ。

少なくとも今日一日、彼の前ではうじうじ悩んだりしないで出来るだけ素直な気持ちでいよう。

この再会の一瞬一瞬を、胸の奥に刻み込んで、それを一生の思い出にしたいから。

リースの後を歩いて玄関へと向かう間に、わたしはそう決心した。

いくらリースの家族と言っても、知らない人たちに会うのは正直言つて気が重い。

それでも彼の笑顔を短い間でもいいから見ていたいという気持ちの方が強かった。

祖父はわたしが彼に淡い恋心を抱いていることを知った上で、もう一度会う機会を設けてくれたのだらう。最高に着飾った姿で。

祖父の思いやりが心に沁みた。

二人きりになったら、もう一度お礼を言わなくちゃ。

玄関を入るとそこは、吹き抜けの明るい玄関ホールになっていて、白っぽい大理石の張りの床には、緑色の葉が沢山ついた木の鉢植えがいくつも置いてあった。

奥から出てきたメイドにお茶を用意するように言うと、リースはわたしたちを応接室に案内した。

すぐにバタバタと騒がしい足音がして、いきなり部屋の扉がぱたんと開かれた。

現れたのは、背の高い女の子。リースと同じ茶色の髪はわざと乱れた感じに短くカットされていて、太いフレームの眼鏡の奥の目は楽しいことしか考えたことのないように輝いている。身体にフィットとしたオレンジ色のニットドレスを着て、銀色のサンダルを履いている。細いループ状の大きなシルバーのイヤリング。

全身から元気なパワーが溢れてる人だなあと思った。

「エレナ……。せめてもう少し静かに登場できないのか。」
「リースが呆れたように言う。」

「ごめんなさい！車の音が聞こえたから、走ってきたのよ。えーつと、こんにちわ。このたびは、兄が大変お世話になりました。」そう言っ、手を差し出してきた。

リースが、妹のエレナですと紹介する。

祖父とわたしは、慌ててソファアから立ちあがった。

握手と自己紹介を終えると、エレナはにこにこしながら、向かいのソファアに座るリースの隣に腰を下ろした。

そこに、先ほどの、お仕着せを着たメイドがお茶を運んできたので、それを引き継いで、エレナがお茶を入れてくれた。

エレナが矢継ぎ早にわたしに質問してくる。年はいくつだとか、趣味は何だとか、島での生活はどんな感じだとか。

「おい、いいかげんにしろよ。あんまり最初からうるさくしたら、ジェシカが疲れてしまうだろ？」リースがたしなめたら、エレナは肩をすくめてニヤリとした。

「あらお兄様って、そんなに過保護だったかしら？・・・もし疲れさせてしまったなら、ごめんなさいね。でも、ジェシカだったら、わたしが今までであった事の無いタイプの女の子なんだもの。凄い美人なだけじゃなくて、どこか夢を見てるような。ちょっと浮世離れしてて、儂げで・・・、そうねえ、おとぎ話に出てくる妖精のお姫様みたい。あーあ。私、パーティーの時には、絶対彼女の隣には居たくないわ。だって、どんなに完璧なメイクをしてお洒落してたとしても、自分がものすごくがさつに見えると思うから。」おどけた調子で言った。

「確かに。ジェシカの隣だけはやめた方が良いかもね。」リースが真面目な顔で何度もうなずいたので、エレナは大笑いして「そこは強く否定する場面でしょ！」と兄を叩く真似をした。

コンコンと軽いノックの音がして、今度は優雅なたたずまいの、ブルンドの女性が部屋に入ってきた。

リースとエレナの母だと紹介された。

グリーンシルクのワンピースをさらりと着こなした彼女はとてもほっそりしていて、とても成人した子供が居るようには見えなかった。

一通りの挨拶を済ませた後、彼女はリースとエレナの間には腰をかけた。

「何をそんなに笑っていたの？」好奇心旺盛な、はしばみ色の瞳は、エレナにそっくりだった。

「お母様、酷いのよ！お兄様がジェシカの傍にいたら私が醜いあひるの子に見えるって言うのよ。」エレナが大げさに嘆いてみせたので、「誰もそんなこと言っていないって。」リースが首をふった。

「あら、あひるは最後には美しい白鳥になるんじゃないかなかったかしら？それにしても本当に、とても綺麗なお嬢さんねえ。その上、誰かさんと違って、もの静かで、お行儀も良くて……。エレナも少しは見習って欲しいものだね。」

「まあ、お母様まで！」エレナが叫び声を上げた。

みんなで楽しそうに笑っている。

自分の事が話題に取り上げられて、わたしはどうしていいかわからなくて、顔を真っ赤にしてうつむくしか出来なかった。

リースがランチの用意がととのうまで、庭を案内しようと誘ってくれたので、わたしはほっとして立ちあがった。祖父とリースの母親は、そのまま応接間に残ると言った。

エレナも一緒に行くと言って、わたしの腕を引っ張った。

「さっきのは冗談だから。今度一緒にパーティーに出かけましょうね。」わたしの腕に、自分の腕をからませながら、エレナが微笑みかけてくれる。

「わたし……。あの、先ほどは、わたしのこと、褒めていただけなんですよね。それでしたら、お礼を言わなければ。・・・有難うございます。」リースもそうだけど、エレナはわたしよりずいぶん背が高いので、話すときに見上げるような形になる。

「あら、敬語はやめない？お友達同士なのに、おかしいでしょ？」エレナはクスリと笑った。

「お友達……。」

わたしとエレナは、リースと一緒に裏庭に向かっている。レンガ敷きの遊歩道の両側には、縁取るように淡いブルーの小さな花が植えられている。リースの歩幅は、わたしと違ってとても大きいので、

どうしても彼の方がどんどん先に進んでしまう。

エレナの言葉に、わたしは戸惑っていた。

”今度パーティーに”とか、”お友達”と言われて、わたしはどう返事をすればいいのか。

二度と会うことも無いってわかってる相手とでも、どこかに出かける約束をしてもいいの？

今日でサヨナラなのに、”お友達”と呼び合うの？

「最初はね、いつも冷静な兄が蕩けちゃいそうな目であなたを見つめてたから、一体ナニゴト？って驚いて。嵐に巻き込まれた時、どこかで頭でもぶつけたんじゃないの？って。・・・と言うわけで、もしあなたさえかまわなければ、是非お友達になりましょうよ。あなたの事もっと知りたいから。」

「あの、そんなんじゃないっ。・・・お兄様には、いつも優しくして頂いて。・・・多分わたしが島の暮らししか知らないから、心配してくださいってるんだと思います。・・・えーっと。あの、はい。お友達になってください。もしよろしければ。わたしもエレナさんの事知りたいです。」わたしは勇気を出して答えた。

女の子の友達。ずっとあこがれてたけど、今まで機会が無くて、諦めてた。

「エレナって呼んでね。それと、兄は普段はあんな甘い顔なんてしないから。」

「はい？」

「あ、わからなくてもイイの。それにしても、ジェシカは仕方ないとしても、あの人自身は自覚してるのかしらね。ま、兄貴の事だから、早速裏工作とかしてそうだけど。」エレナはわたしには全く意味不明な独り事をつぶやいている。

エレナとおしゃべりしながら裏庭にまわると、既にリースはプールサイドの木陰のベンチに座って、わたしたちを待っていた。

「おいで、ジェシカ、ここからの景色も結構楽しめるよ。」リースが自分の隣に座るよう、ベンチの椅子を叩いた。

エレナも行ってらっしゃいと言ってくれたので、わたしはリースの隣に座らせて貰った。

胸がドキドキして、その音がリースに聞こえるんじゃないかと心配になる。

ここからも海が見えるが、わたしたちの島は屋敷の向こう側なので見えない。

「エレナとばかり仲良くしないで、僕の相手もして欲しいな。」

リースがポツリとつぶやいた。

初めて聞く、少し頼りなげな声に、思わず彼の顔をまじまじと見つめてしまった。

一瞬 照れくさそうに目をそらした、少し赤らんだ顔を。

わたしもつられて顔が熱くなる。

洗練された大人な彼が、まるで小さな男の子のように見えた。

なんだか可愛い。

リースの事がすごく身近に思えて、それがとても嬉しくて、にっこりと彼に微笑みかけた。

「ああジェシカ、やっと・・・やっと笑ってくれたね。」

「え？」

「今日は一度も笑顔を見せてくれないから、ずっと気になってたんだ。ここに来るの、嫌だったのかなって。僕に会いたくなかったのかなって。」

「そんな、そんなこと無いです。」わたしは必死に頭を横に振った。リースに会いたくないなんて、そんなこと絶対に無い。

「じゃあ、会いたかったの？」

「・・・・・・・・。」

「僕は、会いたかった。」

「リースさん？」

「こっちに戻って毎朝目覚めるたびに、ここの自分の部屋じゃなく

て、あの島の灯台のベッドの中だったらって願わない日は無かったよ。そうしたら、君の作った朝食と一緒に食べて、野菜畑で過ごしたり、海辺に降りて散歩したりできるだろう？」

わたしはじつと海を見つめながら、彼の言葉をなんとか理解しようとしていた。

リースはこの街では幸せじゃないのかしら？

島での素朴な生活が懐かしいの？

”わたし”に会いたかったって言ってくれてるの？

「ジェシカ、僕はね。」

その時、エレナが声をかけてきた。父親が帰宅したので、戻って来いと。

リースは小さくため息をついて、立ち上がると、すぐにわたしの手を引っ張って立ちあがらせてくれた。

「さ、行こう。うちの料理人の腕もなかなかのものだよ。」

わたしは小さくうなずいて、リースと手をつないだまま、玄関に向かった。

第六話（後書き）

さかのぼって、各話、誰視点か一応書き加えることにしました。

第七話（前書き）

ジエシカ視点含む 三人称

第七話

リースの父親も同席して、食事は和やかな雰囲気のまま終わった。

食後のコーヒーを楽しんだ後、タイラーは暗くなる前に買い出しを済ませて島に戻りたいので、そろそろ失礼しますと切り出した。

それを合図に、ジェシカも大人しく椅子から立ち上がった。

とうとうお別れの時がやってきた。

ちらりと彼を見ると、目があったので、微笑み返した。

(さようなら。今度こそ。)

もう一度会うことが出来て、本当に嬉しかった。リースの住む家を訪れることが出来るなんて、想像すらしてなかったのに。

リースの誠実な優しさに、感謝の気持ちでいっぱいになる。

島に戻ってまたいつもの暮らしに戻っても、独りでこの街で暮らし始めたとしても、いつでも、いつまでも今日の事を忘れないでいるだろう。人生で最も幸せな一日として、思い出すだろう。

祖父に買ってもらった洋服で、着飾った自分が、リースの隣に座って海を眺めたこと。

プールの水がキラキラお陽さまの光を反射して綺麗だった。

緑色のビーチパラソルと林檎の木。

そよ風がさらさらのリースの茶色の髪を揺らしていたこと。

食事の間、リースをそつと見るたびに目が合つて、にっこりしても
らえたこと。

そんな一つ一つの出来事を、そっくりそのままの記憶を、自分だけ
の宝物として心の奥底にしまっておこう。

それでいい。それで充分だと何度も心の中で呟いた。

「お会いできて良かった。あなたが船長をされていた頃のお話とか、
とても興味深かった。それに、長年おひとりで灯台を維持管理する
には大変な苦労があたりだということが良くわかりました。またい
つでもいらしてください。最後に、息子を助けてくださって、本当
にありがとうございました。」

リースの父親が、タイラーに歩み寄り、2人はにこやかに握手を交
わした。

祖父も、美味しい食事に招待くださったこと、感謝しておりますと
返している。

「ねえ、お父様、良いこと思いついたんだけど。」エレナが突然父
親の腕にしがみついた。

「なんだい？エレナ。」

「ジェシカのおじい様は、来週またこちらに買い出しに来られるん

でしょ？だったら、それまでの一週間、ジェシカにここに居てもら
うわけにはいかないかしら？」

ジェシカはヒュッと息をのんだ。一体彼女は何を言い出すのだろう。

「いいえ。そんなわけにはっ。」ジェシカは慌てて断ろうとした。

両親が亡くなって祖父と暮らすようになってから、一度も島の自分
の部屋以外で眠った事も、ましてや他人の家に泊まった事も無いの
だ。

それに、自分は本来ならばこんなところには居るはずの無い人間で
ある。

ジェシカは青くなった。

いくら今日は卑屈にならないで素直でいようと決めたと言っても、
さすがにそんな分不相応なことは許されない。

「それがいい。僕も、そうして欲しいな。」驚いたことに、リース
が期待に満ちた目で、ジェシカを見つめている。

「でしよう？決めた！ジェシカは、近い将来この街で仕事をするつ
もりなんでしょ？それだったら、こっちの環境にも早めになれとい
た方が何かと安心だし。……それに、これが一番の理由なん
だけど、今週の金曜日、海辺の広場で夏のカーニバルがあるの。特
設の遊園地もあるし、コンサートとか、出店や屋台もあって……。
。最後には花火もあるのよ。行かなきゃ損だわ、ねえ、お母様、良
い考えだと思わない？」

「そうねえ。・・・夏のカーニバルは、この街の有名な催し物なんです。ジェシカちゃんも一度も行ったこと無いなら、余りにも可哀相だね。タイラーさん、私どもに、お孫さんを預けていただけませんか？ エレナもジェシカちゃんと一緒に居たら、少しはお淑やかになるかも知れませんし。」

「せっかくのお申し出ですが、これ以上ご迷惑をおかけするわけには行きません。お気持ちだけは有難く頂戴しておきます。」祖父は青ざめたジェシカの顔をちらりと見て、首を横に振った。

「まあ、良いじゃないですか。うちの息子が責任もってお孫さんの面倒を見させていただきますから。一週間なんて、あっという間ですよ。さっきの話じゃありませんが、ジェシカさんが近々独り立ちされる事をお考えでしたら、お互い離れて暮らす良い練習だと思って、我が家に滞在されてはいかがでしょうか。」妻に促されて、リースの父親まで口を出してきた。

一家総出で熱心に説得され、さすがのタイラーもとうとう頷いた。ジェシカは相変わらずプルプルと震えている。

洋服と靴は今日購入したものがあつし、そのほか必要なものは、タイラーを船着き場に送って行ったあと、エレナ達と買いに行くことになった。

あれよあれよという間に、リースの家に一週間泊まる事になったのを、ジェシカはただ受け入れるしかなかった。

少々強引で口達者なエレナにかかれれば、大人しく、口下手なジェシ

かなどひとたまりもないのだ。

「それじゃあ、良い子にしてるんだよ。リースのご家族にご迷惑をかけないようにお利口にしてるんだよ。」

「うん、多分大丈夫。おじいちゃん。気をつけて帰ってね。ポーシヤによるしくね。」

「ああ。楽しんでおいで。来週の土曜日のお昼にここで待ってるよ。」

「わかった。……今日は本当にありがとう。それとね、大好きだよ、おじいちゃん。」

祖父の頬にキスをすると、祖父もジェシカをぎゅっつと抱きしめてくれた。

祖父は、孫をよろしく頼みますと言ってリースと握手して、それから、エレナとジェシカに軽く手を振ると、自分の船に乗って島に帰って行った。

祖父の船が見えなくなるまで、ジェシカはその場を離れられなかった。

ひそかに恋しているリースが優しく寄り添ってくれても、エレナが何か面白いことを言って気を紛らわそうとしてくれても、祖父の船が遠ざかるのを見ていたら、なんだか急に心細くなって、泣かずにいるのが精いっぱいである。

すぐにも祖父の後を追いつがりたくなって、もう少しで小さな子供のように、やっぱり家に帰りたいとリースやエレナに駄々をこねそうになる。

それでもせつかくの親切を無駄にするようなことはできないし、なによりも祖父に恥をかかせるような騒ぎを起こしてはいけないと思いなおして、唇を噛んで我慢した。

われながら、余りの子供っぽさに凄く恥ずかしくなっただし、自分でも大げさだとも思いながらも、急に祖父と離れたことでかなり動揺していた。

いつまでも浮かない顔をしていては、リースやエレナを困らせてしまう事に気がついて、ジェシカは慌てて涙をひっこめると、ぎこちない笑顔を作った。

その後、リースとエレナに連れられて、ショッピングセンターに向かった。

車内で兄妹のたわいのないおしゃべりを聞いているうちに、ジェシ

かも少しずつ落ち着きを取り戻すことが出来た。

（そうよ、二度と会えないわけじゃない。たったの一週間じゃないの。）

ショッピングセンターで、最近できたばかりの評判のお店でリースにアイスクリームを買ってもらった頃には、ジェシカはすっかり楽しい気分になっていた。

第八話

それからの日々は、ジェシカにとって、初めての体験と驚きと興奮に満ちたものだった。

エレナに連れられて、街のあちこちを歩いたり、水族館や動物園にも出かけた。物静かで、おっとりしたジェシカを、エレナは実の妹のように可愛がった。正反対の性格がかえって良かったのか、2人はすっかり仲良しになった。

リースも仕事から戻ると、献身的にジェシカの世話を焼き、彼女が自分の家で居心地良く過ごせるようにと気を配った。

あれから父親にはメラニーとの会話の内容を報告しておいたが、表向きにはまだ婚約中の身なので、事情を知らない母や妹の手前、今のところは本格的にジェシカを口説くような真似は出来ないのだ。

母や妹は、うっかり秘密を漏らす恐れがあるのでリースがメラニーとの婚約を解消したことは知らせずにいる。

こんなことなら、”別に嫌じゃない”という理由だけで、親が勝手に決めたメラニーとの婚約関係をだらだらと続けなければ良かったと、今更ながら悔んでいる。

リースにとっては、もどかしい状態ではあるが、それでも、ジェシカが彼の家で、心から楽しそうにしている姿を隣で見ているだけで、充分幸せだった。

可愛いジェシカは、目が合うたびに、はにかみながらも微笑み返し

てくれる。

本当は、もっと周りに対しても、ジェシカに対しても積極的に意思表示したいのだが、今のところは、それで満足するしかない。

メラニーとの関係を完全に清算し終わるまでの辛抱だとリースは自分に言い聞かせた。

カーニバル当日は、リースも早めに仕事を切り上げて、帰宅してすぐにビジネススーツからTシャツとジーンズに着替えた。

早く会場に行きたくて待ちきれない様子のエレナと、淡いラベンダー色のミニのワンピースを着てます愛らしいジェシカを車に乗せて出発した。

「今日は大勢の人でこった返してるから、絶対に僕達から離れちゃいけないよ。」リースはジェシカに何度も念を押した。

兄のあまりの過保護ぶりに、妹が呆れて思わず目をぐるりと回す。

「わかりました。気をつけます。」ジェシカは真面目な顔でコクンとうなづいた。

エレナが言っていたとおり、海辺の広場は、一夜限りのお祭りを楽しもうと大勢の人で賑わっている。

広場の周辺には、ずらりと出店が立ち並び、ビールやワイン、ホットドックや、焼きリンゴ、フィッシュアンドチップス、ミートパイ、アイスクリーム・・・さまざまな食べ物や飲み物が売られている。

そのほかにも、アクセサリーやバック、洋服、おもちゃ、ポストカード・・・お土産物や、雑貨などを売る店も沢山出店しているので、ただぶらぶら歩くだけでも楽しかった。

夕暮れが迫ってきて、海から生温かい風が吹いている。

赤、黄、青、緑・・・色とりどりのランタンに灯がともり、あたりは幻想的な雰囲気にも包まれた。

大道芸人が得意の芸を披露すると、それを見守っていた観衆がどつと沸く。

広場や路上で演奏するミュージシャン達の周りにも人だかりができ、みんなそれぞれ思い思いに歌に合わせて踊ったり身体を動かしたりしている。

広場の中心には、移動遊園地もあり、キャーキャーと子供たちの興奮した声が聞こえてきた。

しばらくして、エレナが偶然(?)出会った友人たちと合流したので、途中からジェシカはリースと二人きりでお祭りを楽しむことになった。

別れ際に、エレナが意味深なウィンクを兄に送ったが、リースは素知らぬ顔をした。

それからはずっと、はぐれてはいけないからと、リースはジェシカの手をしっかりと握っている。

エレナと三人でいるときは、ジェシカも割と平気でいられたのに、今はどうしてもリースの大きな手の温もりを必要以上に意識してしまふ。

「ジェシカ、お腹すかない？何か欲しいもの無いかい？」突然リースがジェシカの顔を覗き込むようにして言った。

「えーっと、リースさんは、何が良いですか？」本当は、胸がいっぱい、お腹には何も入りそうにない。

「僕は・・・、そうだなあ。」君が食べたい”とはさすがに言えないので、リースはとりあえず、ジェシカの好きそうなものを適当に見つくるって買うことにした。

広場の端の方に細長いベンチを見つけて、そこに並んで座る。

リースの選んだ料理は、どれも美味しかった。少し買いすぎちゃったねと笑っていたけれど、結局2人で綺麗に平らげた。

海の向こうに、チカ、チカと灯台の明かりが見える。

居心地の良い居間でくつろぐ祖父のそばで、ポーシャがお気に入りクッションに丸くなっている光景が目に見えんできた。

「ここ、ソースついてる。」

リースがぼんやりしていたジェシカの頬を、親指でそつとぬぐう。

ジェシカが驚いてポカンとしていると、リースはいたずらっぽい顔をして、そのまま指をぺろりとなめた。

「ななっ！リースさんっ？」

ジェシカは、触られたほうの頬を手で押さえて、灰色の大きな瞳をウルウルさせながら、リースを見上げた。自分の手のひらに触れる頬が熱い。

そんなジェシカの反応に、リースはニヤニヤ笑っているばかり。

その時、ヒュー、ドン、ドンドン、パンと音がして、花火が始まったので、ジェシカはベンチから立ち上がってもっと良く見えるところまで歩いて行った。

この街の名物のひとつと言われるだけあって、次から次へと夜空を明るくするほど大きな花火がキラキラと咲いては消え、咲いては消えていく。

ジェシカにとって、夏祭りの花火は、街の灯りを背景にしているせいか、それほど特別なものだという印象は持っていなかった。

近くで見る花火はこんなにすごい迫力があるんだ。

ジェシカは息をするのも忘れて、きらびやかな夜の空に見とれた。

「すごい……。」小さな声で呟く。

いつのまにか、リースが後ろからジェシカを抱きかかえるように、そっと腕をまわしている。

海風が少し寒く感じ始めていたので、その温かさが心地よかった。

そのままリースの胸に背中を預ける格好で、ジェシカは花火見物を楽しんだ。

「……気に入った？」

花火が終わって、夜空に静けさが戻ると、リースがジェシカの耳にささやいた。

今もまだジェシカはリースの腕の中に閉じ込められたままだ。

「はい。想像してたよりも、ずっときれいでした。島から見てたのとは大違いでした。」ぎゅっと目を閉じて、花火の残像がいつまでもよみがえってくるほどだ。

それでもじわじわと花火という魔法が消えると、ジェシカは自分たちの親密すぎる体勢にぎよっとした。

慌ててお腹に回されたリースの腕をそっとはがそうとする。

「んん？」あくまでもふんわりとジェシカを包んでいるように見えるが、リースの腕はなぜだかびくともしない。

そればかりか一層強く抱き寄せられたような気がする。

「あ……………」

「なに？」リースが口を開くたびに、吐息がジェシカの耳元の髪を

震わせる。

「腕を。」

「腕を？」

ジェシカは頭がのぼせそうになった。

アランにギュッと抱きしめられることは何度もあったし、自分から抱きついたりしたこともあるが、それは兄妹や友達の間の親愛の情を示すようなハグで、今の状況とは大きく異なるような気がする。

それとも同じなのかしら？

アランには何でも聞けるのに、リースには何も聞けない。知りたいことは山ほどあるのに。

せつなくて、どうしたらいいかわからなくて、涙がこみ上げてきた。

自分の腕の中で、地味にもがいていたジェシカが急に動かなくなつたので、リースは後ろから顔を覗き込んだ。

「ゴメン。困らせちゃった？」

「ひっく。」

「！！！！っわ！泣かないで。ゴメン、謝るから。……嫌だったの？ゴメンね。」今度はリースが慌てる番だ。腕の拘束を解くと、ジェシカに向き合い、華奢な肩に手を乗せた。

「・・・・・・・・・・じゃないです。」

「え？」こんな状況下でも、泣いた顔も可愛い過ぎると喜んでいる自分がいて、心の中で苦笑いする。

「イヤなんかじゃ、ないです。」

「そうか・・・・・・・・。安心したよ。僕が暴走しすぎて、君を傷つけたんじゃないかって慌てちゃったよ。」

「ごめんなさい。大丈夫なんです。ただ・・・・・・・・。」

「ん？」

「なんだかすごく、胸が苦しくて・・・・・・・・うん違う。そんなこと言いたいんじゃない。えっと、今日は、ここに連れて来てくださって、本当に感謝してます。おかげで一生の思い出になりました。ありがとうございました。」

「なんだい急にかしこまって。」他人行儀な言葉に、リースは少しいらついでしまう。

「明日から、また島に戻りますが、今日の事は忘れません。これから一生の間に何度かこんなふうには花火を見る機会があるかもしれない。それでも、今夜リースさんと一緒に見た花火が、一番綺麗な花火だと思います。」

それは、言った当人のジェシカには全く自覚はないようだが、立派な愛の告白以外の何物でもなかった。

「ジェシカ？」

「はい？」

「キスしてもいいかな。」ていうか、するから。

どちらにしても、ジェシカの返事は聞こえなかった。

リースの唇がそれを飲み込んでしまったから。

第八話（後書き）

いつもありがとうございます。

今日から一週間ほど、雪山にこもって修行してまいります。

（*^ー^*）

なので、年明けまで更新止まっちゃいます。

ジェシカが最終的に選ぶのはリースなのかアランなのかは、雪に頭突っ込んでじっくり冷やしながら、真剣に考えてみます。

来年もどうぞよろしくお願い致します。

皆さま良いお年を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834z/>

A LOVE STORY OF AN OLD LIGHTHOUSE

2011年12月29日13時48分発行